

## 2021年12月8日～7日

改憲論議とたたかい・自民党実現本部、アジア太平洋戦争開戦80年、沖縄

しんぶん赤旗 2021年12月7日(火)

軍拡・改憲 許さない 市民と野党行動“共闘の道揺るがず”“地域から運動頑張る”



(写真) 臨時国会開会日にあたり、国会に向けて岸田政権に抗議する人たちは6日、衆院第2議員会館前

り、国会に向けて岸田政権に抗議する人たちは6日、衆院第2議員会館前

臨時国会が開会した6日、衆院第2議員会館前では300人(主催者発表)の市民が集まり、「命とくらし最優先の政治を」「軍拡、改憲の動きは許さない」とアピールしました。(参加者の訴え)

主催者を代表して、憲法共同センターの木下興さんがあいさつ。臨時国会で議論される補正予算案により、「史上初めて軍事費が6兆円を超える」と批判。改憲策動も強まっていると語り、「軍拡、改憲は許さない世論と運動を強めていこう」と語りました。

さまざまな立場の市民4氏が訴え。「九条の会」事務局長の小森陽一さんは、岸田政権は9条改憲を強引に狙っていると指摘。憲法改悪を許さない全国署名を広げながら、「改憲派の野望を打ち砕こう」と訴えました。

日本共産党、立憲民主党、社民党、参院会派「沖縄の風」の国会議員が駆けつけました。共産党からは参院の国会議員団が参加し、井上哲士参院議員がスピーチしました。

井上氏は、与党や一部メディアから野党共闘への攻撃が繰り返されているが、「共闘は市民との約束です。この道を揺るがず進めていきます」と表明し、改憲策動を許さないたたかいも力をあわせていこうと呼びかけました。

神奈川県座間市から参加した男性(75)は、「改憲勢力の動きが活発になっており、対抗しないとイケない。9条守れの運動を、地域から頑張りたい」と話しました。

総がかり行動実行委員会、9条改憲NO! 全国市民アクション、共謀罪NO! 実行委員会の共催です。

しんぶん赤旗 2021年12月7日(火)

野党共闘を本格的に 臨時国会開会 総がかりなど行動



(写真) 政党・団体などからの訴え

を聞く人たちは6日、衆院第2議員会館前

総がかり行動実行委員会などは臨時国会召集日の6日、衆院第2議員会館前で開会日行動に取り組みました。市民の発言を紹介します。

「9条の会」事務局長の小森陽一さん(東京大学名誉教授)は、菅・岸田政権が、国会開会の要求に半年間応えなかったことに、「菅・岸田政権は、憲法にもある国民が政治に関わる権利を奪い続けてきた。主権者一人ひとりと敵対する政権だ」と述べました。

2015年の国会前から戦争法強行に反対する市民と野党の共闘が生まれ、衆参で3分の2だった改憲勢力を打ち破ってきたと強調。

「原点に改めて立ち返り、野党の国会議員と連携して改憲派の野望を打ち破ろう」と呼びかけました。

東京9区の市民連合「ねりま9区みんなで選挙(ねり9)」共同代表の小原隆治さん(早稲田大学教授)は、東京9区では、政策協定案の幾度も練り直しや政党への働きかけなど、「2年間地をほうような活動をしてきた」と話しました。市民と野党のリアルな共闘が求められているとし、「野党をつなぐ地域の市民連合の役割が重要だ」と呼びかけました。

共謀罪NO! 実行委員会の角田富夫さんは、13年のこの日、秘密保護法が強行されたことを振り返り、「行政当局が、軍事や外交などの情報を市民の目から覆い隠すことを可能にするともんでもない法律だ」と強調。敵基地攻撃能力など戦争する国への道を進むなかで、「重要な情報を市民から覆い隠そうとする動きが強まってきている」と指摘しました。

「森友・加計問題など政権が吹っ飛ばすような重要な情報が隠されてきた」と強調。主権者の権利を守るため、秘密保護法の廃止、公文書管理法などの抜本的改正を訴えました。

安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合(市民連合)の福山真劫さんは、憲法破壊、権力の私物化、貧困と格差拡大、辺野古新基地建設強行などをあげ「自公政権をこれ以上続けさせるわけにはいかない」と訴えました。

衆院で改憲勢力が3分の2以上となったことに対し「政策合意や候補者一本化の選挙協力など野党共闘路線は絶対に間違っていない」と強調。衆院選では「本格的な野党共闘ができなかった」とし、野党が再びたかう体制をつくりつつあると述べ「私たちも参院選に向けて野党共闘体制をつくり上げるために頑張りましょう」と呼びかけました。

米長官「かつての敵は親友に」 日米同盟の重要性確認—真珠湾攻撃80年

時事通信 2021年12月08日06時04分

【ワシントン時事】オースティン米国防長官は7日、太平洋戦争の戦端を開いた旧日本軍による真珠湾攻撃から80年の節目に当たり「かつての敵は今や親友になった」との声明を発表し、日米同盟の重要性を再確認した。

オースティン氏はまた「米国は同盟・パートナー国と共に、(真珠湾攻撃で戦死したり、国を守るために犠牲になったりした)英雄たちが築いた『自由で開かれたインド太平洋』を守り、ルールに基づく国際秩序を維持する」と決意を表明した。

日米開戦から80年

東京新聞 2021年12月7日 07時45分

一九四一年十二月八日。日本軍がマレー半島に侵攻、米ハワイの真珠湾で米軍艦船を攻撃し、太平洋戦争が始まった。圧倒的な国力差があった日米の開戦から八十年。あの無謀な戦争から私たちが学ぶべき教訓は、

◆今、同じ空気を感じる ノンフィクション作家・澤地久枝さん



開戦当時、満州（今の中国東北部）の吉林にいました。十一歳、国民学校の五年生です。その日は朝起きてすぐにラジオの臨時放送があって、開戦を知りました。私は精神的に早熟だったと思いますが、どう考えたらいいかわからなかった。実は米国のことも英国のこともよく知らなかったのです。

戦争はそれから四年続くわけですが、当時の私は本当にばかな軍国少女でした。この戦争に勝つと素直に信じていた。昭和十九（一九四四）年、特攻に行く若者たちの最後の言葉がラジオで放送されました。ドラマだったはずなのに、実際に死んでいった若者の肉声だと信じてしまった。皆が死んでいくなら自分も死ななければならぬと思ひ込むようになりました。

死ぬためには飛行機に乗るしかない、予科練（海軍飛行予科練習生）に行きたいと思ったんです。予科練の検査を通るために体を軟らかくする体操までしていましたよ。もちろん海軍は女を取らないわけで、同じ思いの友人と「残念だ」といつも話していました。

やがて兵器などの材料用に金属の回収が始まり、街頭の赤い郵便ポストも消えました。母が「ポストまで持って行くようじゃ、この戦争は負けね」と言ったことがあります。「反戦主義者」か「非国民」か、そんな言葉でなじりましたよ。母は何も言わず黙った。

私のように、よく考えない、でも熱中する女の子は国家には都合のいい人間だったでしょうね。戦場を知らない、空襲などの攻撃も受けたことのない思春期の少女の夢物語は、敗戦であっさり消えました。

つくづくばかな子でしたね。本当に恥ずかしい。でも、それがなければ今の私もないんです。ばかなことを言ったり、したりしたこと責任を問う人は誰もいませんが、私はあの時の自分を許せない。間違いから逃げまいと思って生きてきた。それが戦争に関して調べ、書いてきた理由です。

当時を知らない人たちは、どうして無謀な戦争を始めたのかと不思議ですね。私の実感でいうと、国民が戦争を選んだんじゃないんです。ある日突然、降ってきたのよね。高村光太郎や斎藤茂吉のように熱狂した人もいましたが、それは一握り。黙って「そうか」と思っている人たちの方が多かった。

ただ、軍人の独断専行だけでは歴史が動かなかったことは確かです。彼らを支持して同調する、もっといえば彼らに先立って動くような人たちがいて、こうなった。

今、私は同じ空気を感じるのです。憲法を守ろうという人は少数派になったといわれ、変えようという人たちが声高になってき

ている。それに対して、今の国民はどうか。国の運命は偉い人が考えることと思っていないでしょうか。世の中は皆が知らない間に変ってしまうのに。そういう意味では、日本は八十年前と変わっていない。

今の北朝鮮や中国の動向について不安を感じる人がいるのは分かります。私のように「憲法を守る」「自民党に反対」と言うことと孤立することは自覚しています。でも、声高に言う人たちの意見が本当に多数派なのか。

安倍（晋三元首相）さんの言うことを支持すれば、日本は憲法を変えて戦争できる国になる。戦争って遠くの出来事じゃない。日常的なことなんです。食べるものがなくなり、愛している人が殺される。それに耐えられますか？ そう尋ねると、皆「嫌だ」と言いますね。

こういう私の意見が真つすぐ受け止めてもらえたら心配はしませんが、今はそうじゃない。頑張って生きて、言い続けなければと思っています。（聞き手・大森雅弥）

<さわかち・ひさえ> 1930年、東京都生まれ。菊池寛賞の『記録 ミッドウェー海戦』など著書多数。近著は中村哲氏との共著『人は愛するに足り、真心は信ずるに足る』（岩波現代文庫）。

◆戦争は国滅ぼすもの 「昭和史を語り継ぐ会」主宰・保阪正康さん



日本はなぜ、あの戦争を始めたのか。よく質問を受けます。この問いに対しては、大状況と小状況という二つの面から考えることができます。

大状況を見ると、近代日本は日清戦争以来、ほぼ十年おきに戦争をしていました。戦争は国益を生むプロジェクトになっていました。戦争に勝って、賠償金と領土を取る。帝国主義的な拡張のため、最も手っ取り早い方法が戦争でした。軍事主導体制の下、日本の権益を守り、拡大するため、戦争は不可避であり、戦争を選択することに、ためらいはありませんでした。

小状況について言えば、いくつかの政策の失敗が指摘できます。日中戦争で日本は、中国を一撃で制圧できると思っていました。ところが、戦争は長期化し、いら立ちが生まれます。そして、こう考えました。中国が戦争を続けるのは、米国などが支援しているからだ。だから、われわれの最終的な敵は米国や英国、オランダだ。そういう論理で始めた戦争でした。

ただ、そんな状況でも戦争以外の選択はあるはず。ここで問題となるのは、その時の政策決定者です。軍事は政治の下にあると考えている人間であれば戦争はしなかったでしょう。少なくとも政治の意見を聞き、米国と戦争ができるのか、もっと議論したはず。

開戦時の首相だった東条英機もそうですが、軍人は軍事が政治の上にあるという教育を受けていました。違う考えを持つ軍人も少数ながらいましたが、そういう人は指導部には入れません。軍事優先の教育を受け、それを忠実に継承した軍人だけが指導部に入りました。

## 「君たちは矢だ」艦長は言った…日米開戦 80 年 真珠湾奇襲、突撃した 103 歳元搭乗員の証言

東京新聞 2021 年 12 月 8 日 05 時 00 分

「暴慢不遜ナル宿敵米国ニ対シ愈々 12 月 8 日ヲ期シテ開戦セラレントシ…」。1941（昭和16）年11月24日。

千島列島・択捉島の単冠湾に停泊していた空母

「蒼龍」の艦内で、艦隊を率いる南雲忠一海軍中将の訓示を艦長が代読した。約80人の航空機搭乗員たちに、ハワイを攻撃し、米国と戦争を始める旨が告げられた。



吉岡政光さんが搭乗した九七式艦上攻撃機の同型機（宇佐市教育委員会提供）

吉岡政光さん（103歳）＝東京都足立区＝は「これは帰れない。ハワイで死ななければいけない」と、興奮から全身の血がすべてデッキに吸い取られるような感覚に陥った。

11月26日、空母6隻を中心に編成された海軍機動部隊は単冠湾を出発。12月8日（日本時間、現地時間は7日）。吉岡さんは3人乗りの「九七式艦上攻撃機」に搭乗し、飛行位置を割り出し、戦闘時に爆弾や魚雷を投下する「偵察員」を務めた。

艦長から激励を受け、重さ800キロの魚雷を搭載した機体は一路、オアフ島の真珠湾を目指した。日本軍の真珠湾攻撃などに端を発した太平洋戦争の開戦から12月8日で80年。

### ◆告げられなかった行き先



海軍機の前でポーズを取る吉岡政光さん（本人提供）

石川県出身の吉岡さんは18歳のとき、役場に貼られた志願兵募集のポスターを見て「どうせ20歳で兵隊に取られるのだから」と、海軍に入った。操縦士を希望したが募集がなく、航法や戦闘で操縦士を補助する偵察員の道に進んだ。

真珠湾攻撃20日前の1941年11月18日、吉岡さんが乗り込んだ空母「蒼龍」は大分県・佐伯湾を出港する。艦内のパイプには凍結防止用の石綿が巻き付けられていた。一方で、半ズボンの作業服を積み込んだとの話も耳にした。「寒いところなのか、それとも暑いところへ行くのか」。乗艦歴は2年を超えていたが、航海の行き先を告げられなかったのは初めてだった。

日本では、軍事学が構築されていませんでした。江戸時代には、各藩が軍事学を持っていました。「戦わない」という軍事学です。ところが、明治に入ると、それは古いものとして捨てられてしまいます。明治の軍人教育は、ドイツ型の軍事学を取り入れました。その基本は「皇帝のために死をいとわない」というものでした。

思想や哲学がなければ、戦争はできません。そうでないと、ただの暴力です。日本軍は戦術も戦略も、何のために戦争をするのかということさえ曖昧でした。思想や哲学のないまま突進し、その場しのぎの判断で戦っていました。だから、最後は人間を爆弾にしたのです。

私は、蒋介石の次男である蔣緯国（いこく）さんに何度か会って話を聞いたことがあります。米国で軍事学を学んだ彼は、こんなふうに言っていました。日中戦争の時、日本軍は侵略の軍隊だった。侵略軍は、どこまでも突っ込んでいく。そうしないと不安になるから。そして、最後は崖から落ちる。

昭和史や近代史を調べてきて私がたどり着いた結論の一つは人間は誰でも状況によっておかしくなるということです。戦争になると価値観が逆転します。「人を殺してはいけない」が「一人でも多く殺せ」に変わる。そういう異常な状況をつくってはいけないんです。

政治で話がかかれば戦争だ、と主張する人が今でもいますが、戦争を軽々に論じるべきではありません。そういう時代があったことは事実だとしても、その考えはもう通用しない。これを国際的な了解事項にすることが重要です。

私たちの国は、残念ながら戦争を営業品目のようにしてしまいました。一等国になりたいがために、戦争を手段として使いました。その結果、すべてを失いました。戦争は国を滅ぼすと理解することが大事です。そして「戦争は嫌だ」という感情論ではなく、戦争とは何なのか、そのメカニズムを知って否定する必要があると思います。（聞き手・越智俊至）

<ほさか・まさやす> 1939年、北海道生まれ。ノンフィクション作家。『昭和陸軍の研究』『あの戦争は何だったのか』など著書多数。『半藤一利 語りつくした戦争と平和』も監修。

### 満州事変から日米開戦までの主な出来事

1931年9月	柳条湖事件が発生し、満州事変が勃発
32年3月	満州国の建国を宣言
5月	「五一五事件」で犬養毅首相が暗殺される
33年2月	国際連盟が満州からの日本軍撤退勧告案を可決
3月	日本が国際連盟からの脱退を通告
36年2月	「二二六事件」で高橋是清蔵相らが暗殺される
37年7月	盧溝橋事件が発生し、日中戦争が始まる
12月	日本軍が中国・国民政府の首都・南京を制圧
38年4月	国家総動員法公布
39年9月	ドイツがポーランドに侵攻し、第2次世界大戦が始まる
40年9月	ベルリンで日独伊三国同盟調印
10月	大政翼賛会が発足
41年4月	日米外交交渉が始まる
7月	日本軍がフランス領南部インドシナへの進駐開始
8月	米国が日本への石油輸出停止を発表
10月	東条英機内閣が発足
11月	米国が「ハルノート」を提示。中国からの撤兵、三国同盟からの離脱などを要求
12月	日本軍がマレー半島に侵攻、ハワイ・真珠湾の米軍艦船を攻撃。太平洋戦争開戦

それがハワイであることを知らされたのが、海軍機動部隊の集結地となった千島列島の択捉島に到着してからだった。

死は怖くなかった。むしろ「アメリカが世界一の海軍を持っていることは知っていたし、偵察員の同期でこんな大戦争に参加できるのは何人もいない。いい死に場所を与えてもらった」と喜んだという。

◆魚雷命中、と思いきや…



蒼龍から出撃して約2時間後、吉岡さんたちの第1次攻撃隊は朝を迎えたハワイ上空に到達する。分厚い雲の切れ間から海岸線が見え、隊長機からモールス信号で「全軍突撃せよ」を意味する「ト連送」が発信された。

戦艦の攻撃を命じられていたが、既に各所から黒煙が上がり目標が見つからない。ようやく、真珠湾内のフォード島西側に停泊する戦艦を認めた。高度10メートルの超低空で進入。戦艦に400メートルまで接近し、吉岡さんが魚雷を投下すると、一気に軽くなった機体がふわっと浮いた。ほどなく、魚雷は命中。高さ30メートルはあったらだろうか、水柱が2本上がった。

しかし、すぐに攻撃は失敗だったことに気が付く。狙った戦艦の砲塔に砲身がなかったのだ。演習用の標的艦「ユタ」だった。

蒼龍に戻ると「武勇伝」を聞こうと待ち構えていた兵士に取り囲まれた。ようやく抜け出した時は、既に夕食の時間。搭乗員が集まった部屋は対照的に重苦しい空気が支配し、皆が黙々と食事を口にしていった。

◆戻らなかった戦友



旧日本海軍の空母「蒼龍」(大和ミュージアム提供)

その場で吉岡さんは、第2次攻撃隊の5機が未帰還で、戦死者が出たことを知る。親しくしていた1つ年下の搭乗員もいて、ショックを受けた。急に疲れが出て、報告書作成は翌日回しにして就寝した。

蒼龍は42年6月のミッドウェー海戦で沈没する。吉岡さんは内地で補充要員の養成を命じられ、艦を降りていたため難を逃れた。その後は南方の戦場を回り、45年に茨城県の百里原海軍航空隊へ転属したが、部品不足などから稼働可能な飛行機はほとん

どなかった。そのころ、本土決戦に備えてやりにするのだと短剣の供出を命じられた。「そんなもので何をするんだ」とあきれた。

百里原海軍航空隊で終戦を迎える。玉音放送の内容を部下たちに教えようとしたが、戦死者への感情がこみ上げ、しばらく言葉が出なかった。

◆「戦争の無残さ みんな考えて」



真珠湾攻撃を振り返る吉岡政光さん

戦後は運送会社や海上自衛隊に勤めた。家族にも戦争体験を話すことはなかったが、「後世の人に知ってもらいたい」と思い始めた数年前から口を開いた。

「もう少し早くやめてくれたら、たくさんの人が戦死しなくて済んだ。遅くとも昭和19年初めごろに講和を申し込んで戦争をやめてくれたら、こんなにたくさんの人が死なずに済んだと今でも思っている」

最近の国際情勢を「日米が戦争をした理由よりも複雑怪奇で、一触即発という感じがする」と懸念する。「戦争は無残で最大の人殺しだということを、みんな考えてほしい」(小松田健一)

自民改憲本部、年内に総会 岸田首相出席、機運醸成狙う

時事通信 2021年12月07日15時53分



自民党の古屋圭司氏＝2020年7月、東京都千代田区

自民党は7日、憲法改正実現本部の幹部会合を党本部で開き、岸田文雄首相(党総裁)が出席しての総会を年内に開く方針を決めた。党を挙げて改憲に取り組む姿勢をアピールするのが狙い。古屋圭司本部長は記者団に「憲法改正を最終的に判断できるのは国民だ。正しい世論を醸成し、国民が参画する機会をつくる」と強調した。

全国で遊説・対話集会を 自民改憲実現本部が活動方針

日経新聞 2021年12月7日18:00



自民党の憲法改正実現本部の会合

(7日、党本部)

自民党の憲法改正実現本部(古屋圭司本部長)は7日、今後の活動の方針を決めた。全国で遊説や対話集会を開き、改憲の必要性を訴えたと確認した。古屋氏は記者団に「各都道府県連にも同じような組織を作ってもらおう。プッシュ型の取り組みをしたい」と

話した。

同本部に「憲法改正・国民運動委員会」をつくり、改憲に向けて世論に働きかけると一致した。会合には安倍晋三元首相や麻生太郎副総裁らが出席した。

#### 自民「憲法改正実現本部」初会合 全国各地で“必要性”説明へ NHK2021年12月7日 16時34分



憲法改正に向け、自民党の「憲法改正実現本部」の幹部が、初めて会合を開き、国民の幅広い理解を得るため、全国各地で必要性について丁寧に説明していくことなど、今後の活動方針を確認しました。

「憲法改正推進本部」から名称を改めた「憲法改正実現本部」は7日午後、本部長を務める古屋元国家公安委員長のほか、安倍元総理大臣や麻生副総裁らも出席して初会合を開きました。

会合では今後の活動方針について協議し、憲法改正の実現に向けた取り組みをさらに強化することや、国民の幅広い理解を得るため、全国各地で必要性について丁寧に説明していくことなどを確認しました。

そして実現本部の中に「憲法改正・国民運動委員会」を設置し、全国遊説や対話集会などの活動を精力的に進めていくことになりました。

会合のあと、古屋氏は記者団に対し「国民が憲法改正について主体的に参画する機会をつくることが大事で、その環境整備を行っていききたい」と述べました。

#### 自民改憲実現本部が会合 国民の機運醸成へ

産経新聞 2021/12/7 19:09

自民党憲法改正実現本部（古屋圭司本部長）は7日、党本部で幹部会合を開いた。実現本部は11月に「推進本部」から名称を変えた。この日の会合では、本部内に新設する「憲法改正・国民運動委員会」が、改憲推進のため各都道府県連内に設ける組織と連携し、地方遊説や対話集会を重ねる方針が示された。党是とする改憲への機運醸成を図る狙いがある。

この日は、今後の活動方針や態勢強化の目的を確認したほか、顧問や事務総長らの幹部人事についても協議。近く本部会合を開く方針を了承した。会合には、安倍晋三元首相や麻生太郎副総裁も出席した。

会合後、古屋氏は記者団に「組織強化により、国民が主体的に参画する機会を提供したい」と強調し、改憲の是非を問う国民投票の実施に意欲を見せた。本部事務総長に就任予定の新藤義孝元総務相は、今国会中の憲法審査会開催を目指す意向を明らかにした。新藤氏は衆院憲法審の与党筆頭幹事を務める。

#### 参院選と改憲国民投票、同日実施案を「評価」 安倍氏

日経新聞 2021年12月7日 22:30



安倍晋三元首相

自民党の安倍晋三元首相は7日、BSフジの番組で憲法改正に言及した。2022年夏の参院選と改憲の国民投票を同日に実施する案について「1つのタイムスケジュールを示したことは評価したい」と述べた。

同案は日本維新の会の松井一郎代表が唱えている。安倍氏は「問題はどこを改正するかだ。中身を憲法審査会で毎日でも議論していくべきだ」と指摘した。

米国が北京冬季五輪の外交ボイコットを表明したことについて安倍氏は「国の一つの意志の表示になる」と強調した。「各国がそれぞれ判断を迫られている。今まで以上に欧米は厳しい状況だ」と語った。

しんぶん赤旗 2021年12月7日(火)

#### 敵基地攻撃能力の検討明言 首相 改憲「国民に議論喚起」

岸田文雄首相は6日、衆参両院で所信表明演説を行い、歴代首相の所信表明演説のなかで初めて「敵基地攻撃能力」の検討を明言しました。また、改憲に向けて「国民の議論を喚起しよう」などと呼びかけました。

演説で岸田首相は、貧困と格差を広げてきた「新自由主義」路線の「是正」を口にしたものの、コロナ禍であらわになった脆弱（ぜいじゃく）な医療体制の根本的立て直しは示さず、傷ついた経済の支援もあまりに不十分な内容を列挙。一方で大企業支援策などを掲げました。

岸田首相は、新たな経済対策は「コロナ克服・新時代開拓のため」だと自画自賛しましたが、長年の医療従事者数の抑制・病床削減政策に何ら反省も示さずに推進する姿勢を表明。事業者への給付金は個人・法人向けともに大半が持続化給付金の半分にすぎません。

「新しい資本主義」を標榜（ひょうぼう）した首相ですが、財界本位のデジタル化への支援策を並べ、「分配策」はきわめて限定的な賃上げの促進だけで、労働法制の見直しには言及しませんでした。

#### 求心力低下？岸田首相も絡む「安倍」包囲網の成否 「最強のキングメーカー」狙いに渦巻く警戒心 泉 宏：政治ジャーナリスト

東洋経済ONLINE 2021/12/08 6:30



岸田首相と安倍氏の関係は表向きは

蜜月だが……（写真：つのだよしお／アフロ）

自民党最大派閥の領袖となった安倍晋三元首相の保守派リーダーとしての一連の言動が内外に波紋を広げ、岸田文雄首相の政権運営にも影響を及ぼしている。特に「台湾有事は日本有事」との

安倍発言は中国を激怒させ、岸田首相の対中外交を混乱させている。

安倍氏は麻生太郎自民党副総裁とともに岸田政権誕生の立役者で、岸田首相との会談でも表向きは「全面支援」を繰り返す。しかし「内情は複雑」（安倍派幹部）で、岸田首相を軸とする自民党内実力者たちの間でも、「最強のキングメーカー」を狙う安倍氏への不満と警戒心が渦巻く。

衆院選勝利で自信をつけた岸田首相は、水面下では安倍氏への付度をかなぐり捨て、党・内閣人事などを絡めて「安倍包囲網」を仕掛けているようにも見える。もちろん安倍氏も応戦の構えだが、足元の安倍派の足並みの乱れもあって、さまざまな権謀術数の前に求心力も低下し始めている。

「表舞台」に復帰した安倍氏

安倍派誕生が決まったのは、第2次岸田政権発足翌日の11月11日。自民党最大派閥の前細田派（清和政策研究会）が同日の総会で、安倍氏の派閥復帰と新会長就任を満場一致で決めた。安倍氏にとって昨年9月の首相辞任から約1年2カ月ぶりの「表舞台」復帰だ。

注目されたのはその際の安倍氏の就任あいさつ。「中国は近年急速な軍事費の増大を行い、台湾に対する軍事的な威圧を高めている」「憲法改正はまさに立党以来の党是だ。この議論の先頭に清和会が立とう」——。中国への対決姿勢や憲法改正などで「安倍カラー全開」（派若手）で派内に檄を飛ばした。

その後、12月1日の安倍発言は波紋を広げた。同日、台湾で開かれたシンポジウムに日本からオンライン参加した安倍氏は「新時代の日台関係」とのテーマで講演し、「台湾有事は日本有事であり、日米同盟の有事でもある。習近平国家主席は断じて見誤るべきではない」と、中国による台湾への軍事的圧力を強い表現で牽制してみせた。

長期間日本の外交戦略をリードしてきた安倍氏の発言だけに、中国側は直ちに「強烈な不満と断固たる反対」を表明。華春瑩外務次官補が同夜、垂秀夫駐中国大使を呼び出し、「中国の内政に乱暴に干渉した」などと抗議したうえで、「（日本が誤った道を進めば）必ず火遊びで焼け死ぬだろう」と激しい言葉で非難した。

これに対し、抗議を受けた垂大使は「日本国内にこうした考え方があることは、中国として理解をする必要がある。中国側の一方的な主張については受け入れられない」と反論。松野博一官房長官も2日の記者会見で「（日本政府の）立場に基づく然るべき反論をした」と説明した。

林氏の鞍替えに不満たらたら

ただ、この安倍発言には伏線があった。11月10日発足の第2次岸田政権の外相に林芳正氏が就任したことへの安倍氏の不満だ。林氏は岸田派のナンバー2として今回衆院選で参院議員を辞職し、衆院山口3区から出馬して当選したばかりだが、「安倍氏にとって、地元山口で親の代からの“天敵”（関係者）だからだ。衆院鞍替えを強行した林氏は、早くも「ポスト岸田」で総理総裁を目指す考えを明言している。これに対し安倍氏は「党の反対を押し切って強引に鞍替えした人が、いきなりポストを得るのはおかしい。しかも、日中友好議連会長の林氏（すでに辞任を表明）の外相起用は中国に誤ったメッセージとなる」と不満たらたらだ」とされる。

当然、安倍氏の怒りの矛先は岸田首相に向かった。しかし、岸田首相は丁寧に時間をかけて手順を踏んでみせただけで、「結果的には安倍氏の不満をスルーする形」（官邸筋）で林氏の外相起用を貫いた。

安倍氏らの支援で自民党総裁選を勝ち抜いたのが岸田首相だ。ただ、その後の党・内閣人事でも安倍氏が強く求めた「高市早苗幹事長・萩生田光一官房長官」ははねつけた。当時の細田派内に、この安倍氏の要求に異論があったことを理由としているが、「安倍氏と距離を置くことで、政権運営の主導権を握る狙い」（官邸筋）だったことは間違いない。

岸田政権発足からすでに2カ月が過ぎたが、キングメーカー然として振る舞う安倍氏に抵抗してみせることが、内閣支持率の上昇につながっているのは事実だ。「その成功体験が本格政権に向けた政局運営の自信につながっている」（官邸筋）とみられている。

安倍氏は11月30日、わざわざ首相官邸に出向いて岸田首相と面会した。名目は安倍派会長への就任報告で、約20分間の会談後、安倍氏は記者団に「党内の最大の政策グループとして、これからは岸田政権をしっかりと支えていくということについて、派の総意としてお伝えした」と笑顔で語ってみせた。

安倍氏の官邸訪問は、首相辞任後初めて。連絡を受けた岸田首相はエントランスホールで安倍氏を出迎え、会談終了後も同ホールまで同伴して、丁寧に頭を下げて見送る配慮をみせた。

こうした岸田、安倍両氏の表向きの蜜月ムードの中、臨時国会が召集された12月6日夜に都内のホテルで盛大に開催されたのが安倍派（清和政策研究会、95人）パーティーだった。

最大派閥の領袖となった安倍氏のお披露目とあって、岸田首相、山口那津男公明党代表、麻生太郎副総裁、茂木敏充幹事長ら政権中枢がこぞって駆け付け、約2000人の参加者で満員の会場を盛り上げた。

高市政調会長に注目が集まったワケ

冒頭、主催者としてあいさつした安倍氏は「日本政治の背骨を担ってきたわれわれ95人の清和会が、一致団結してしっかりと岸田政権を支えていく。それが私たちの責任だ」と最大限の表現で岸田政権支持を強調。岸田首相も「（安倍派が）政権のど真ん中で支えてくださっている。これが政治の安定に大きな意味を持つ」などこちらも熱いエールを返してみせた。

安倍氏の盟友で岸田首相の後見役も担う麻生太郎副総裁は「主要国の中で一番政権が安定しているのが日本だ」と指摘。茂木幹事長も「会場を見渡しても清和会の勢いはすごい、派閥の領袖として安倍、麻生両氏とともに内閣を支えたい」と主流派の結束を訴えた。

各来賓の挨拶は「歯の浮くような安倍氏礼賛」（関係者）に終始したが、その中で一番注目されたのが高市政調会長だ。安倍氏の支援で総裁選出馬にこぎつけ、岸田氏を脅かす健闘で一躍、「次の総理総裁の有力候補」にのしあがったからだ。

現在は無派閥だが、清和会出身だけに、一部では6日の安倍派パーティーでの高市氏再入会のうわさも広がった。しかし、安倍派内の反高市感情は強く、高市氏自身も前日の5日の民放番組で「安倍派になったら帰れるかなと思っていたが、特にお誘いもなく今に至る。しばらくひとりぼっちかもしれない」と自嘲気味に

語っていた。

パーティーでの来賓あいさつでも「無派閥の高市です」と前置きしたうえで、対中強硬姿勢の安倍氏を高く評価して見せたが、安倍派議員席の拍手はまばら。犬猿の仲とされる同派所属の稲田朋美元政調会長は高市氏に背を向ける形で議員席を離れる一幕もあった。

手綱さばきを誤るわけにはいかない岸田氏

そもそも、安倍氏の派閥復帰と会長就任には、派内でも不満が少なくなかったのが実態。「細田さんを議長にして、すぐに自分は派閥の会長に就任というのはあまりにも虫が良すぎる」（派内の関係経験者）という声が相次いだからだ。だからこそ、安倍氏が寵愛する高市氏の再入会を推し進めようとしたことが、同派内の反安倍勢力の台頭につながったとみられる。

岸田首相は、こうした最大派閥の足並みの乱れにつけ込もうとしているようにもみえる。周辺は「一強を誇示し続けた安倍・菅政権の手法から、岸田流の『全員野球』に変えることが党内外の政権支持に結びついている」と胸を張る。

確かに、最新の世論調査で内閣支持率の上昇が目立ち、それが安倍氏に付度しない岸田首相の強い自信につながっているのは否定できない。ただ、安倍氏は自民党の岩盤支持層を掌握しており、「岸田首相が少しでも手綱さばきを誤れば、最大派閥を一気に敵に回す」（自民長老）とのリスクは避けられそうもない。

## 首相の所信表明、野党「具体性乏しい」と一斉批判 立憲は一線画す

朝日新聞デジタル 12/7(火) 8:00 配信



国会議事堂=東京・永田町、恵原弘太郎撮影

衆院選後の初の本格的な与野党論戦を前に、野党各党は岸田文雄首相の所信表明演説に対して、党首が一斉に「政権は何をやるのかよくわからない」などと具体性が乏しいと批判した。その一方で、「批判ばかり」とのイメージ脱却を狙う立憲民主党からは「一定の評価」の声も上がった。「国民をどうやって困っている状況から助けるか、具体策が全部抜けている」国民民主党の玉木雄一郎代表は、首相の演説をこう批判した。同党はこの日、日本維新の会とともに、国会議員に支給される文書通信交通滞在費（文通費）の使途公開などを義務化する歳費法改正案を衆院に共同提出。自民、公明両党を上回る「改革」姿勢を打ち出し、存在感を高めたいとの狙いがある。日本維新の会の馬場伸幸共同代表も、岸田政権の看板政策「新しい資本主義」について「具体的に何をやるのかよくわからない」などと繰り返した。社民党の福島瑞穂党首は「熱量のない演説。今の問題を『こう解決していくんだ』という骨太の方針が出てこない」。れいわ新選組の山本太郎代表は「以前の総理より滑舌がいいぐらいの感想しかない」と語った。共産党の志位和夫委員長は、「敵基地攻撃能力」の検討に言及があった点を踏まえ、「新しい危険が現れてきた演説」と強く批判。そのうえで憲法改正に触れ、「自民党の改憲項目に反対の点では一致がある」とする立憲民主党などと共同歩調で政権側と対決したいとの考えを示した。一方で、立憲の泉健太

代表は、他党とは一線を画す「批判」の封印ぶりが目立った。「立憲が掲げてきた言葉が随所にあった。野党の役割はこういうところにあると実感した」と述べ、首相の演説に一定の評価も示した。泉氏は、政権追及の場だった「野党合同ヒアリング」の見直し、共産との「野党共闘」のあり方を考え直す方針を表明し、枝野幸男前代表からの路線転換に意欲を示している。泉氏は「（首相は）抜本、抜本と繰り返したが、これまでのコロナ対策に問題があったことの証明だ」とも指摘したが、「具体的な今後の政府の施策を見ていきたい」と述べるにとどめた。

## 首相、改憲シフト鮮明 所信表明演説

産経新聞 12/6(月) 20:48 配信



第207臨時国会の衆院本会議で所信表明演説を行う岸田文雄首相=6日午後、衆院本会議場（松井英幸撮影）

岸田文雄首相は6日に行った所信表明演説で、憲法改正に向け、国会議論の活発化と国民の理解を深める必要性を訴えた。首相は自民党総裁任期中の改憲に意欲を見せており、党の体制も見直すなど「改憲シフト」を鮮明にしている。【表でみる】岸田首相の「看板政策」 「われわれ国会議員には憲法のあり方に真剣に向き合っていく責務がある」首相は演説でこう語り、与野党の枠を超えた国会議論に期待感を示した。同時に、「国民理解のさらなる深化が大事だ」として、国会議員に国民の議論を喚起する役割も求めた。10月の自身の演説や、昨年10月の菅義偉首相（当時）の演説よりも踏み込んだ内容だ。首相は党政調会長時代から改憲をテーマにした地方政調会を開き、改憲を実現する上で国民の理解の重要性を実感してきた。今回、改組した「憲法改正実現本部」に、全国遊説などを担う「国民運動委員会」を設置したのもその表れだ。首相は周囲に「一部の人が盛り上がるのではなく、裾野を広げる必要がある」と語る。先の衆院選で、自民や日本維新の会などの改憲勢力は国会発議に必要な3分の2以上を確保した。改憲論議が進展するか、今国会は試金石となる。（田村龍彦）

## 政府、辺野古不承認に対抗し不服審査請求 防衛局が「私人」で訴え 判断主体は「身内」の国交相

東京新聞 2021年12月7日 21時30分

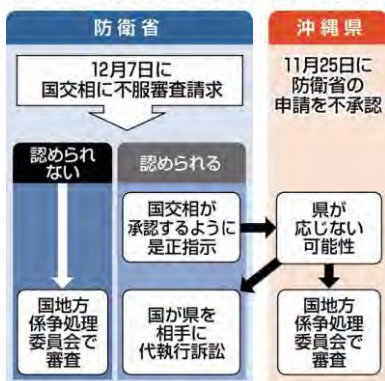
米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）移設に伴う名護市辺野古の新基地建設を巡り、政府が7日、設計変更申請を不承認とした県への対抗措置として講じたのは、行政不服審査法に基づく審査請求だった。行政から不当な処分を受けた国民の救済を図る制度だが、事業主体の防衛省沖縄防衛局が「私人」の立場で訴え、「身内」にあたる国土交通相が是非を判断する。公平性への疑念は根強く、対立の解消は見通せない。

新基地建設の阻止を掲げる故・翁長雄志前知事が2014年に就任して以来、国と県の対立は続いている。国が海上埋め立て承認を巡る県の処分不服を申し立てるのは、15年、18年

に続いて3回目だ。

◆ 「選手と審判が同じ立場」

辺野古新基地建設の  
設計変更承認申請を巡り想定される流れ



この制度を利用することの問題点は「選手と審判が同じ立場」（玉城デニー知事）という例えが端的に言い表している。国と地方の争いを裁くのが国交相では、中立性が担保されない可能性がある。しかも、国の安全保障政策の一環として工事を進める沖縄防衛局が、申し立てにあたり「私人」に立場を変えることも、県民や専門家らの反発を招く一因となっている。

防衛省は本紙の取材に「国も埋め立てを行っている一事業者であり、（同法による）手続きは可能だ」と説明する。国交相による裁決が出るまでの期間は未定だが、18年の不服申し立ては裁決まで半年を要した。主張が認められなかった側が法廷闘争を含め、さらなる対抗措置に踏み切るのは必至で、対立は長引く可能性が高い。

◆ 「防衛局は救済対象の『国民』か」

専修大の白藤博行教授（行政法）は「閣内で閣僚は意見の一致が求められる。国交相が（国の機関である沖縄防衛局の訴えを）審査すれば、おのずと結論は決まってしまう。沖縄防衛局が法によって救済が図られる『国民』なのかを問わなければならない」と話す。（川田篤志、山口哲人）

辺野古不承認で対抗措置 国交相に不服審査請求—防衛省

時事通信 2021年12月07日20時07分



米軍普天間飛行場の移設に向けた埋め立てが進む名護市辺野古沿岸部。右は米軍キャンプ・シュワブ＝2019年12月、沖縄県名護市

防衛省沖縄防衛局は7日、米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の名護市辺野古への移設計画をめぐり、県が埋め立て海域にある軟弱地盤の改良工事に伴う政府の設計変更申請を不承認としたことに対抗し、行政不服審査法に基づき斉藤鉄夫国土交通相に審査を請求した。不承認を取り消す裁決が出れば、国と県による法廷闘争に発展する可能性が高い。

防衛省の石川武報道官は同日の記者会見で「不承認とされる理由はなく、取り消されるべきだと判断に至った」と説明した。

一方、沖縄県の玉城デニー知事は県庁で記者団に、政府機関の間で審査が行われることについて「公平・公正な判断は事実上不

可能だ」と述べ、国側の対応を非難。不承認について「『法律による行政』の原理の下、厳格に審査した」と改めて正当性を主張した。

辺野古不承認で審査請求 防衛省、沖縄県に対抗措置

東京新聞 2021年12月7日18時12分（共同通信）



沖縄県名護市辺野古の沿岸部＝20

20年12月

防衛省は7日、米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の名護市辺野古への移設計画を巡り、設計変更を不承認とした沖縄県への対抗措置として、行政不服審査法に基づき斉藤鉄夫国土交通相に不服審査請求を申し立てた。移設計画の全面中止を訴える県の反発は必至。法廷闘争に発展する可能性が高く、工事の長期化は避けられない情勢だ。

設計変更は、埋め立て予定海域で見つかった軟弱地盤を改良するための工事で、防衛省が昨年4月に申請した。沖縄県は今年11月、地盤の安定性を十分検討していないとして不承認としていた。

斉藤国交相は、防衛省の申し立てを踏まえ、県の判断を審査する。